

附 宜長の主な著作目録（一九八二年筆者調べ）

- 1 『算法円理鑑』宜長・閔・宜義著 天保五（一八三四）年
刊 日本学士院、小倉文庫、京大数学教室、東北大学、中
曾根家蔵
- 2 「解義算法」宜長稿・自筆 文化十三（一八一六）年
日本学士院蔵
- 3 「四斜不等極数術」小野良佐・閔・宜長識写本 文化十
（一八一三）年 日本学士院蔵
- 4 「十条解義」宜長著 写本 年紀不明 高樹文庫蔵
- 5 「附二条解義」宜長編 写本 中曾根家蔵
- 6 「前球算法」宜長試・自筆 年紀不明 日本学士院蔵
- 7 「精要算法下巻七問解」宜長識 文化十二（一八一五）
年 中曾根家蔵
- 8 「直内容側円及大小円解」宜長著 写本 高樹文庫蔵
- 9 「直内側円解」斎藤四方吉解 写本 日本学士院蔵

第三章 斎藤宜義について

第一節 斎藤宜義の人となり

宜義は文化十三（一八一六）年一月生まれ、明治二十二（一八八九）年に歿した。長次郎または長平（戸籍）と云った。字（名乗り）、中国で、実名の外に加えた名で日本も明治前これに倣ってつけた）は宜義、号は算象または、逐算（算は庵で、いおり）、あるいは乾坤独算民（乾坤は天地、独りの数学者という意か、自信たっぷりである）、また乾坤自由と称した。宜長三十三歳の時の子である。母は秩父の出身ともいうがよくわからない。兄弟姉妹も不明であるが、男子が一人玉村町大字南玉の町田家の養子となったが、故あつて信州の山中で晩年を終った（玉村八幡宮の算額を奉納した町田清格とは別人であろう）。この人は非常な秀才だったという。宜義が成長する頃は斎藤家はまだ資産があり、初めは父宜長の教えを受け、続いて江戸に出て和田寧の教えも受けたらしい。これは弟子というよりも学友としてであろう。古来天才的人物には奇行が多いらしいが、宜義は奇人といった性格の人であった。なかには本当には思われない話もあるが、二、三古老の話（昭和五年のこと）によれば、

一、宜義がたびたび庭の松の木を眺めているので、不思議に思った近所の人々がわけを聞くと、松の葉を勘定（数える、計算）しているのだと云った。どのくらいあるかと尋ねると、しかじかであると答えた。その人は実際